福島県民俗学会 News Letter

ふぉーらむ・F 5

Sep. 2017
福島県民俗学会

http://fukushimafolklore.jimdo.com/
fukushima_folklore1971@yahoo.co.jp

研究会報告　平成 28 年度 東北地方民俗学合同研究会「地域おこしと民俗」

平成 28 年度の東北地方民俗学合同研究会は、「地域おこしと民俗」をテーマに 11 月 19 日に秋田市の協働大町ビル・千秋の間で開催された。当日は以下の 6 本の発表と総合討議が行われた。

①岩鼻通明氏 (山形県民俗研究協議会)「**霊山と地域おこし―羽黒山と戸隠山を事例として**」
②川合正裕氏 (福島県民俗学会)「**民俗を活かした地域おこし―福島県大沼郡三島町を事例として**」
③佐藤敏悦氏 (東北民俗の会)「**地域おこしと郷土食の活用―B1 グランプリから震災復興へ**」
④前川さおり氏 (岩手民俗の会)「**語り部 1000 人プロジェクト―岩手県遠野市の事例から**」
⑤下田雄次氏 (青森県民俗の会)「**地域振興における民俗芸能の記録と復興―青森県上北郡七戸町 (旧天間林村) 上原子集落における剣舞踊りの記録撮影と盆踊りの復興の取り組みから**」
⑥石郷岡千鶴子氏 (秋田県民俗学会)「**『縁』の解体と創造―地域キャラクターの限界性を探る**」

岩鼻氏は山形県の羽黒山と長野県の戸隠山について、アンケート調査をもとに対照的な観光客数の推移を示す両者の分析を多様な要因から行った。特に文化を活用したまちづくりにおいて進められる伝統的建造物群保存地区や文化的景観への選定を取り上げ、後者については地域の暮らしぶりや生活文化が重要なカギを握るため、民俗学が積極的に関わるべきことを主張した。当学会の川合氏は三島町の事例を報告した。同町では昭和 40 年代から観光イベントで民俗行事が再現され、町の地区プライド運動で指定した年中行事の一部は文化財指定に結実した。町の生活工芸運動では山ぶどうやヒロロ細工による民具製作技術が注目されて町の大きな施策となり、国の伝統的工芸品指定へとつながっている。昭和期からの町ぐるみの地域活性化策に民俗が中核として位置づけられている点が注目される。佐藤氏は郷土食と地域おこしの問題を述べた。まず国や自治体の観光・地域振興策、JR のキャンペーンや B-1 グランプリなどによって郷土食が発見、創作される過程を紹介し、さらに宮城の復興商店街では郷土食や地域食材の創作料理が観光に大きく寄与していることが指摘された。これらは近代以降に生まれた食文化の地域性が発見される機会にもなり、その活用も含めて民俗学者の関わり方を考えていく必要性を訴えた。

川合氏の発表のようす

遠野市の前川氏は「民話のふるさと」遠野の誕生から昔話を語る「語り部」の定着、観光施設の整備などの過程を追いつつ、遠野物語発刊百周年に企画された「語り部 1000 人プロジェクト」を紹介した。昔話から歴史や芸能等に内容を拡大し大人から子供まで新しい語り部を発掘・育成する事業で、認定会や研修会、イベントへの派遣などを行っている。これは洗練され地域ブランド化した語り部活動に対して本来「語り」が持っていた多様性や生活文化としての側面を再認識するための取り組みでもあるという。下田氏は芸能の調査者であり担い手でもあるという立場から行った、民俗芸能の活性化への支援について報告した。七戸町上原子集落において、外部の調査者から協力者、学習者、支援者と様々に立場を変化させつつ地域に入り込み、剣舞への参入と盆踊り復活への支援を行った経緯が紹介された。多様な思惑をもつ当事者間のコミュニケーションの上に継続・復活する生身の芸能の姿を描き出し、状況に応じて様々な立場に立ちながら関わり続ける調査者・支援者の役割の重要性が示された。秋田の石郷岡氏は、民俗芸能や祭りを継承し

つつ人々の強い結びつきによって維持されてきた過疎地域・比内町大葛集落の事例と、対照的にマスコットやキャラクターといった現代的な地域おこし策によって商店街の活性化を図ろうとする秋田市や大館市の取り組みを紹介した。これらの事例がもつ課題や可能性を具体的に整理しながら、地域活性化に必要なのは人の結びつきであり、概念としての「縁」を再考する必要性を主張した。

会場からは施策を主導する側の意図や、地域や住民による意識の相違、合意形成のあり方について質問が寄せられた。民俗と地域おこしが結びつくうえでは地域の内側からの動きと外部からの働きかけが幾重にも絡み合い、多様な展開をみせることが議論から明らかとなった。またそれを担う地域の人々の営みを丹念に追うことの重要性が再確認された。例年同様、東北各地における様々な取り組みの現場から豊かな内容の報告を聞けたことが、最も大きな収穫であった。（事務局　内山大介）

研究会報告　地域持ち回り研究会

平成 28 年 11 月 3 日、「市町村合併と地域の文化財」をテーマに地域持ち回り研究会が喜多方市で開催された。まず東町蔵屋敷「会陽館」で喜多方市教育委員会の蓮沼優介氏に「市町村合併後の文化財 現状と課題」と題してご報告いただいた。喜多方市は平成 18 年に周辺４町村と合併している。近年は文化財の指定や選定が続き話題に上ることの多い喜多方市だが、旧町村を含めた資料館施設の維持管理や人員、財源等の課題も抱えており、そのあたりを含めた具体的な取り組みを中心にお話しいただいた。

続いて小沢弘道副会長の解説を交えながら、重要伝統的建造物群保存地区の選定を目指して準備が進められている小田付地区の巡検が行われた。喜多方市の中心部には田付川をはさんで小荒井と小田付というふたつの歴史的な町並みが残され、正月にはそれぞれで初市が行われることでも有名である。そのうち小田付地区は国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を目指して平成 27 年度に調査が行われ、報告書が刊行された。当日は生憎の雨だったが、古い蔵座敷や店蔵の連なる町並みを歩き、小原酒造の酒蔵見学もあわせて行われた。さらに喜多方市郷土民俗館に移動して農具を中心とする展示の見学、そして天保年間建築と伝えられる県指定重要文化財の手代木家住宅などの見学を行った。

報告会や巡検の途中では民具などの有形文化財をはじめ、町並みの保存、祭礼や芸能等の無形の文化財まで幅広く考えることができた。市町村における文化財の保存・活用、調査研究、さらに指定や選定などの仕事の具体的な姿を知る機会となり、また有意義な議論や情報交換が行われて盛会のうちに終了した。（事務局　内山大介）

福島県内 化財の動き　海を渡った じゃんがら念仏踊り

「じゃんがら念仏踊り（以下、じゃんがら）」は福島県いわき市および周辺町村に伝わる郷土芸能で、お盆の時期に各地区の青年会などが新盆を迎えた家々をまわり、太鼓と鉦をならしながら踊って死者と遺族を慰める供養の芸能である。いわき市では平成元年に 95 団体が存在し、同４年にはうち 28 団体が市の無形民俗文化財に指定された。同 27 年 11 月時点で 114 団体が認められる。

そのじゃんがらが昨年８月、五輪期間中のリオ・デ・ジャネイロで東京都が開催したイベントに招聘された。２月に筆者のもとに出演依頼が舞い込み、渡航期間と時期の関係で一つの団体で受けることが難しく、市内のじゃんがら団体に声をかけて参加者を募った。20 名が集まって３月に連合チームを発足。筆者が会長を仰せつかり、様々な彩りから成るという意味の「磐城じゃんがら彩志会」を皆で考えて名付けた。

当会は青年会・保存会・愛好会の８団体で構成したが、連合チームとは難しいものだ。地域に根付いた青年会・保存会と、好きな人たちが集まって作る愛好会の方向性の違いは想像以上で、さらには海・山・街の風土の違いが生み出す団体ごとの色はときに対立を生み出した。融合できるものとできないものを可視化させながら、乗り越える努力をした。

さて、ブラジルでは８月 18、19 日の２日間で３回演舞をし、たくさんの人に見ていただいた。ブラジルはサンバの国と言われる通り皆ノリが良く、道中太鼓を鳴らしながら歩いていくと笑顔で迎えられ、演舞が終わると大きな歓声と拍手が鳴り響いた。じゃんがらが「供養の芸能」であるとは現地の人々は理解しなかっただろう。それでも「FUKUSHIMA」と無機質に記号化されることもあった私たちの故郷の、私たちのアイデンティティを世界に向けて表現・発信できたことは、二度とない貴重な経験であった。（会員　田仲桂）

ブラジルでのじゃんがら念仏踊りの公演

展示見学記 愛媛県立歴史文化博物館を訪問して

愛媛県立歴史文化博物館は愛媛県西予市宇和町に立地し、重要伝統的建造物群保存地区として知られる「卯之町の街並み」にもほど近い。県内の歴史と民俗分野の資料収集、調査研究などを目的に平成６年に開館している。

訪問のきっかけは、同館の民俗担当学芸員である大本敬久氏が、昨年 12 月の東京文化財研究所の「無形民俗文化財研究協議会」で、「四国の災害特性と無形文化遺産の防災」と題して報告されたのを聞いたことであった。福島県の被災地域を中心に民俗資料をはじめ文化財の保全と記録に当たる者として、東日本大震災の後に四国で取り組まれている文化財防災の取り組みなどの話をより詳しく聞きたいと感じ、併せて同館の展示の見学もさせて頂いた次第である。

大本氏は「愛媛資料ネット」等の活動を通じて、同県内の災害史の掘り起しや、民俗を含めた文化財防災の取り組みをされている。「愛媛は災害が少ない」という言説が県内では広く流布しているが、実際には過去の大災害を伝える文献史料や石碑などが多数存在するという。災害の記憶が風化する中、近い将来必ず起こるとされる南海トラフ巨大地震に備えて、住民はじめ関係者の意識改革が必要だと語られていたのが印象的だった。

また、同館の所在する宇和町は、昨年から再稼働を始めた伊方原発からほぼ２０キロ圏にあるという。実際に、同館の目と鼻の先には、愛媛県のオフサイトセンターがある。東京電力福島第一原子力事故を実際に経験した身として、同事故による避難地域に取り残された文化財の問題、また避難地域に伝承されてきた祭りや芸能などの民俗の問題にも、自ずと話が及んだ。福島県での我々の経験に対して、愛媛県をはじめ四国・九州などの西日本の文化財関係者や研究者が大きな関心を抱いていることを実感した。

同館は２階建ての広大な建物で、エントランスは２階にある。２階部分に時代ごとの歴史展示室が４室と常設展示室、１階に民俗展示室が３室と企画展示、そして子ども歴史館がある。展示内容は非常に充実しており、見学はほぼ１日がかりである。民俗展示室では、漁村、山村、農村の民家構造と、生活風景が緻密に再現されている。四国遍路の歴史的・地域的な展開を紹介した展示も非常に興味深い。特に、愛媛の祭りと芸能を紹介した展示では、仙台藩の分家である伊達家が宇和島藩を治めたことなどから、南予地方を中心に鹿踊りなど東北との繋がりを示す芸能が広く伝承されていることも紹介されていて、地理的な距離を越えた民俗文化の交流史を実感することができた。（会員　大山孝正）

展示室のようす

note から　越後のミケランジェロ、石川雲蝶の足跡を辿る旅

石川屋安兵衛（雲蝶）・石川雲蝶源正照・源雲蝶とも名乗り、近年バスツアーまで出ている彫刻師。ネットで探り2016 年６月末に新潟市から南魚沼市まで北から南へと足跡を辿った。本堂や彫刻類が昔の火災で焼け、建て替えられていた三条市の本成寺（菩提寺）も、今と同じ大きさの昔の建物の彫刻類が雲蝶作であったらさぞかし見ごたえのある建物であっただろう。鞘堂を開けてあった長岡市栃尾の貴渡神社では小振りな御堂全面に物語の彫刻が廻らされて作者の誇りを見ることができた。彫刻を枠からはみ出る「こぼす」という技法は二本松の太鼓台などと比べると、雲蝶のそれはそれほど大きくなく上品さが出ていた。雲蝶の作品よりもこぼしがされている弟子の作品と並べてある長岡市の林興庵本堂の欄間彫刻ではその比較を見ることができる。小高い山の上にある三条市の石動神社の龍の彫刻の口の表現などは肉厚で迫力があり、様々な社寺・山車彫刻を見て来た私も唸らせる一品だった。夕暮時、崩れかかった長い石段を登って来た苦労が報われた。魚沼市の西福寺開山堂が一番有名らしいが、壁や天井を彫刻で埋め尽くしただけで上品さに欠け、依頼者が金に任せて長時間逗留させて作ったように私には感じられたが、壁や天井以外の独立している彫刻を１体毎に見ると、このような彫刻は外には見たことが無いと唸らせる。

石動神社の龍彫刻

山車彫刻は、性格上近くからじっくり見ることができる社寺建築とは作風が異なるべきと思っているが、祭り屋台が結構ある新潟県内でも彼の作品が１台もないという事は、山車彫刻には不向きであった作風ではないかとも考えたい。幻の雲蝶作の祭り屋台１台でも現代で見たいものだ。この文を読んだ皆さんも時間が出来たら越後のミケランジェロの作品類を見に行っていただきたい。（会員　相原達郎）

Column コラム 狼と馬と山の神

本紙 4 号で岩崎真幸副会長は、県立美術館企画展「よみがえるオオカミ　飯館村山津見神社・復元天井絵」の見学記を寄せている。氏は「阿武隈高地の山の神信仰と眷属のオオカミとの関係を再考するヒントが隠されている。同時に、民間信仰を支えてきた画家たちの系譜や技法をも再評価しなければならない」と、示唆に富む評価をされた。また野沢謙治副会長は、阿武隈山地における狼と馬との死闘の世間話を収集・整理され、狼と山の神信仰について考察されている。田村市船引町や滝根町の例では、「狼に食い殺された馬を供養し山の神の祠に祀っているのは狼の害を防ぐためである。滝根町でも狼の害を防ぐために大山祇神社を祀ったという伝承がある」とし、「山の狼は里の農耕に恵みをもたらす山の神、あるいは山の神のメッセンジャーなのである」と指摘している（『ふくしまの世間話』歴史春秋社、2002 年）。

両氏の考察から山津見神社に狼の天井絵が奉納された民俗がうかがえる。阿武隈山地はじめ会津地方でも、明治以前には放牧による馬の飼育が行われており、特に仔馬が狼の被害にあっていたことが近世の農書や紀行文などからもわかる。宝永元年（1704）の佐瀬与次右衛門著『会津歌農書』の「山郷牧馬 附野飼」はその一例である。

山郷の牧の夏草しげるらん　野飼の馬のこゑ（声）ぞ聞る / ひきよせてつかハぬ内ハ牧に馬　幾日もをきて野飼するなり / 狼のあれてあそなす野牧にハ馬をはなすも昼の内なり

（日本農書全集第 20 巻『会津歌農書・幕内農業記』農山漁村文化協会、1982 年）

天明 8 年（1788）に幕府の巡見使に随行して東北・北海道を巡歴した古川古松軒は、南相馬市原町において「野馬追原」と呼ばれる原に放牧されている馬、特に仔馬が狼に喰い殺される光景を詳述している。「この辺にも山犬（狼のことなり）住んで馬の子を取ることあり。領主より鉄砲打ちを数人付け置かるけれども、闇夜などにはいかんともなし難し。馬も相応の知恵ありて、夜分は子を真中にねさせ、親馬多く取り回し、替わる替わる番をするなり。狼もまた馬の子を取らんと思う時は、馬の傍を徘徊して見すれば、親馬子を取ウれまじとて狼を追い廻す、その隙に草の中より隠れいたる山犬でて、親馬のいぬ隙を伺い子を取りて、二疋も寄りてくわえ逃ぐるよし。馬より狼の智はまされたりといえり。」（『東遊雑記』平凡社、1964 年）

近世には会津地方や相馬地方、そして阿武隈山地に県内にいかに多くの狼が棲息しており、放牧の馬に多くの被害があったかがわかる。野沢氏は放牧中の馬を狼の害から防ぐオイヌ祭りについて、西郷村や南会津町田島等の事例から山の神と狼（オイヌ様）との密接な関係を述べ、祭りが種子蒔き後に行われることから、農耕との関係を指摘している。

日本では絶滅したとされる狼が県内にも数多く棲息しており、人馬に多くの被害を与え、それを防ぐための民俗や信仰も生まれてきた。そのひとつがオイヌ祭りであり、山津見神社の「オオカミの天井絵」であったといえよう。（会長　佐々木長生）

Announce 研究会のお知らせ

◆ 第 34 回 東北地方民俗学合同研究会

【日　時】11 月 25 日（土）12:30 ～ 16:45
【会　場】弘前大学（青森県弘前市文京 1）
【テーマ】民俗資料の発見と新たな活用可能性を探る
当日は企画展「小川原湖民俗博物館旧蔵資料の保存と探求―弘前大学民俗学研究室の取り組み」も開催されます。

◆ 平成 29 年度 地域持ち回り研究会（中通り）

【日　時】10 月 21 日（土）
【場　所】福島県伊達市内
【テーマ】養蚕の民俗と民具（仮）

※会員のみなさまには、いずれも詳細が決まり次第ご連絡いたします。

つぶや記

▼今年度から本紙の編集を事務局で担当していますが、その最初からかなり刊行が遅れてしまいました。特に早々に原稿をいただいた皆様にはお詫び申し上げます。▼年 2 回の定期発行を目指していますが、原稿が揃わないのが最も大きな悩みの種です。毎度のことながら皆様の積極的な投稿をお待ちしています。▼当学会では東北各県や北関東・北陸をはじめ全国の学会・研究会との機関誌の交換を積極的に進めています。受贈図書は事務局で整理をしていますので、ぜひご活用ください。お問い合わせは事務局までお願いします。（内）

福島県民俗学会通信誌『ふぉーらむ・F』第 5 号
2017（平成 29）年 9 月 30 日発行
編集・発行　福島県民俗学会（会長 佐々木長生）
福島県会津若松市城東町 1-25　福島県立博物館内
事 務 局：内山大介・大里正樹・山口拡
編集担当：内山大介